

# S. R. ブラウンの二つの会話書

— *Prendergast's Mastery System*. (1875)を中心として—

木 村 一

## 1 はじめに

日米修好通商条約（1858）の締結を受けて、S. R. ブラウンは1859年に来日している（注1）。日本での滞在期間は1859年11月1日から1879年までのおよそ20年間であった（一時帰国は含めていない）。来日直後は J. C. ヘボンの一家と神奈川の成仏寺で同居するなどしながら、日本語の研究、聖書の翻訳などを進めている。中でも1863年に刊行された日本語と英語の会話書である *Colloquial Japanese*.（以下、『会話日本語』）は良く知られるところである。その後も、1872年には翻訳委員社中の委員長、1873年にブラウン塾を開くなど、多方面にわたって活躍している。

また、1875年に会話書 *Prendergast's Mastery System, Adapted to the study of Japanese or English*.（以下、『プレnderガスト』）を著している。そこで、本論では、ブラウンの編んだ二つの会話書のうち、『プレnderガスト』について整理した上で、『会話日本語』をはじめ同時代の資料を交えながら、『プレnderガスト』の諸版、また、829の例文を対象として、ローマ字の綴り方、分かち書きといった点から検討を加えてみたい。

## 2 *Prendergast's Mastery System* と、先行研究について

冒頭の例文を挙げると、偶数ページ（本論の縦棒線をはさんで左側）に日本語の例文をローマ字とカタカナによって記し、奇数ページ（本論の縦棒線をはさんで右側）に英語の例文を示す。

1. *Sore wo nas'tte kudasaimasho ka?*  
ソレヲナスツテクダサイマセウカ

1. Will you do me the favor?

荒川（2018）によると、T. プレnderガスト（Thomas Prendergast, 1806-1886）は語学教則書 *The Mastery of Languages, or the Art of Speaking Foreign Tongues Idiomatically*.（1864）を著している。教授法は、英語教育のみならず、フランス語（1868）、ドイツ語（1868）、スペイン語（1869）、ヘブライ語（1871）、ラテン語（1872）の学習書としても展開されている。そのような背景から、ブラウンが日本語の習得に適用したものである。書名また PREFACE. から、日本語学習に加えて、英語学習にも使用することを企図していることが分かる。

そして、日本語学的観点からは、『会話日本語』と『プレnderガスト』の動詞を中心に考察を行った飛田（1962 a・b）（注2）がある。昨今では、松本（2010）が、日本語

としての文体、待遇表現、文法、語彙の面から分析を行っている。

## 2-1 諸版について

松村 (1962) (注3) では 諸版について次の刊年があることを示す。

これ (筆者注: 『プレンダーガスト』を指す) の初版は一八七五 (明治八) 年に出ているが、一八八四 (明治一七) 年版もあり、さらに刊年の明示されていないものもある。(中略) 七五年版の初版、八四年版の再版に対して、無刊年版は第三版ということになるかと思われる。そして日本語だけについていえば、無刊年版のものがいちばんととのえられた形になっているということが出来る。

三つの版が存在していることとなる (本論でも準じて、「1875年版」と「版」を用いて記す)。さらに、明治学院大学図書館には、1878年のもの (以下、「1878年版」) がある。また、1875年版の扉には 'F. R. WETMORE & Co., Publishers; YOKOHAMA, JAPAN.' とある一方、1878年版と1884年版は、'KELLY & Co., Publishers; YOKOHAMA, JAPAN.' とある。各版とも扉の書体や約物に異なりが生じている。1875年版、1878年版、1884年版、無刊年版 (筆者未見) と4種が存在することになる。

以下、本論では、明治学院大学図書館所蔵の1875年版の日本語部分を基にして進めることとする。なお、日本語部分についてはローマ字表記とカタカナ表記からなるが、原則として、ローマ字表記を用いる。

## 2-2 1875年版の見返しの記述について

明治学院大学図書館所蔵の1875年版の見返しには次のような記述がある ([図1])。

In 18673 Dr. S. R. Brown published a similar work, with the Kana Writing suplied; and subsequently his "Mastery System". Both of these books have been extensively used by beginners, native as well as foreign.

History of Protestan Missions in Japan.

Rev. G. F. Verbeck Dr.

( page 755 )

原文そのままに記したが、suplied → supplied, Protestan → Protestant となる。また、Dr. の後に何等かの文字が記されているようであるが、ちぎれているため判読不能である。押印は「明治学院大学図書館」とある。

上記の 'In 1863' 以下について、まず、'History of Protestan Missions in Japan.' は、フルベッキによる論文名 ('History of Protestant

[図1] 1875年版の見返し



Missions in Japan.）であり、*Proceedings of the General Conference of the Protestant Missionaries of Japan, Held at Osaka, Japan, April, 1883.* (1883) の23頁から186頁に収録されていることが、鈴木進氏（元湘南国際女子短期大学教授）の教示により確認できた。同書は、大阪市内の居留地公会堂にて、1883年4月16日月曜日から4月21日土曜日にかけて行われた日本プロテスタント宣教師協議会総会の議事録をまとめたものである（注4）。そのために、同書のプログラム（4月16日）に上記のタイトルが掲載され、41頁（〔図2〕）に、〔図1〕の見返しと同様の記述がある。‘(page 755)’は不明であるが、書き写したものと見えよう。

〔図2〕 1875年版の見返しの引用部分



参考までに、G.F.フルベッキ（1984・1985）では、該当箇所を次のように訳出している（44頁）。

一八六三年、S・R・ブラウン博士は同じような書物を「かな」を付して出版した。

その後『マスターリー・システム（Mastery System）』を著した。これら二書は、外国ならびに日本人の初学者に広く用いられた。

実際には、1875年版の見返しの記載が誰の手によるものなのかは判明していない。いずれにせよ1883年以後に記されたということになる。

### 3 ローマ字の綴り方について

『会話日本語』と『ブレンダーガスト』のローマ字の綴り方について、飛田（1962 a）では次のように記す。

P本（筆者注：『ブレンダーガスト』を指す）が大体ヘボンの『和英語林集成』の初版の表記に準じているのに対して、（筆者注：『会話日本語』が）語頭と語中語尾のガを ga と nga で書き分けたり、格助詞「へ」のほとんどを e で示したり、その表記は忠実である。

そこで、『会話日本語』と『ブレンダーガスト』に加え、ブラウンと1859年来日したヘボンによる和英・英和辞書『和英語林集成』初版（1867）と再版（1872）におけるローマ字の綴り方を〔表1〕〔表2〕にまとめその関連性を整理してみたい。『ブレンダーガスト』には、ローマ字表記における記載方法などについて、PREFACE と INSTRUCTIONS とともに記述はない。

全体を扱うべきではあるが、詳細は〔表1〕〔表2〕に譲り、清音・濁音・拗音・撥音・促音・長音・その他について、特徴的な部分を中心に進めることとする。

『ブレンダーガスト』の収載箇所については、頁、SENTENCE、SECTION、会話番

号の順で収載箇所を示す。例えば、18頁、SECOND SENTENCE, SECTION I, 会話番号6は、(18-2-1-6)とする。

### 清音

#### ・ア行

「イ」は、もっぱら*i*ではあるが、44例ほど*i*とウムラウトの使用が見られる。以下、出現順に挙げ、類するものは略す(例、*omoimash'ta*を示した際には、*omoimasenanda*, *omoimas*は記さない)。

*oīya* (2-1-1-2 他), *oīde* (2-1-1-4 他), *oīi* (30-2-5-2), *atarashii* (56-4-1-6), *kiite* (58-4-2-4), *ii nasai* (60-4-2-6 他), *sōi* (62-4-3-5 他), *iitsketa* (66-4-4-4 他), *omoi nas'tta* (110-7-1-1 他), *omoimash'ta* (110-7-1-3 他), *yaszi* (110-7-1-5), *odeai* (122-7-4-1), *hanaike* (136-8-2-11), *chiisana* (156-9-3-1 他), *iīye* (158-9-3-6 他), *hiite* (170-9-6-6), *hiroimash'ta* (190-10-5-2), *Niigata* (192-10-5-8), *iimas* (192-10-5-8), *sōi* (200-11-2-7 他), *oīi* (210-11-5-4)

母音が連続する際、*i*が二つ目になった場合に用いられている傾向がある。しかし、*atarashii* (12-2-4-4 他)や*Isogashii* (14-2-4-16)といったものもある。

他にも、*Oānesan* (98-6-2-3), *deāwō* (122-7-4-4), *oāi* (122-7-4-5 他), *oāinas'tta* (190-10-5-4), *haōri* (56-4-1-6), *toōku* (126-7-5-1 他), *hayaōki* (150-9-1-1)などについても母音連続の際に、*ā*が6例と、*ō*が28例用いられている。上記の*deāwō*に対して、*de awō* (120-7-3-12)もある(語中の*wo*も問題である)。一方、*jōkisen* (138-8-2-16)は母音の連続との関わりがない。

一方、『会話日本語』は7章からなるが、例文は4章と5章に載る。4章にあたる‘Sentence in English and Japanese Colloquial.’(以下、4章)には用いられていない。しかし、5章にあたる‘Dialogues.’(以下、5章)で*moōshitai* (173・D1・F1)(注5)や*goyōō* (173・D1・N2)のように*ō*が用いられている。*koēki* (173・D1・F11)・*koē:* *ki* (173・D1・F28)や*uēde* (182・D2・F28)と*ē*もある。

また、「エ」については*ye*をすべて用い、*e*は用いていない。『会話日本語』では*e*、*ye*が共存するが、『和英語林集成』初版と再版では*ye*にまとめられている。

母音の無声化と思われるものについては、アポストロフィを使用しているようである。イ段において「ヒ」*h'to* (18-2-1-6 他)が多数であるが、*hito*も併用されている。ウ段は、「ク」*watak'shi* (100-6-2-10), 「ス」*nas'tta* (60-4-2-9 他), *nas'tte* (2-1-1-1 他), *s'kunai* (132-8-1-10 他), *mus'ko* (200-11-2-8), 「ツ」*ts'kimashta* (30-2-4-17), 「フ」*f'tsz ka izen* (72-4-5-8), *f'kigen* (74-5-1-4 他), *f'ta toki* (154-9-2-2 他), *f'tatsz* (132-8-1-9 他), 「ム」*m'ma* (196-11-1-10 他)といったものが見られる。また、*k* (*watakshi* (4-1-2-3 他)), *sh* (*tashka* (120-7-3-11 他)), *s* (*Skoshi* (18-2-1-12 他))も同様であると考えられる。

その他のダイアクリティカルマークの使用としては、*Nogé* (192-10-5-6), *ōtohimash'ta* (192-10-5-6), *ōji* (96-6-1-13 他), *ōba* (116-7-2-16)がある。

#### ・カ・サ・タ・ハ行

「ク」 ku, k, k', 「シ」 shi, sh', sh, 「ス」 sz, s, s', 「ツ」 tsz, ts', tz, 「ヒ」 hi, h', 「フ」 fu, f, 「ム」 mu, m' と、複数の表記を持つものがある。ただし、tz は 2 例のみで誤りの可能性が高い。前出の母音の無声化とも関わるが、『会話日本語』と大幅な変化が見られず、依然としてバリエーションが多い。

### 濁音

ガ行鼻音として *sashi angemas* (64-4-3-11) の 1 例だけが確認できた。その他のガ行は非鼻音として記されている。

「ズ・ヅ」 dz が用いられるものの、一例のみ dzu がある (*kodzukai* (90-5-5-3))。また、「ダ」 da, d'a とあり、d'a は *d'arō* (28-2-4-10 他), *d'atta* (70-4-5-3 他), *d'akke* (70-4-5-5) である (*dai* (30-2-5-3) もあるが誤植の可能性はある)。

### 拗音

拗長音として (jiu) や、単音との併用 (sho, jo) もあるが、『会話日本語』と比べると全体にわたって大幅に整理されている。また、直音化した例として、寄宿寮を *Kishikuriō* (128-7-5-8) とする。

### 撥音

子音 m と p の前には m を用いている。子音 b についても m を基本としながらも、*Shinbashi* (26-2-3-11 他), *sinbun*・*shinbunshi* (86-5-4-6 他) は n としている。また、*sam mai* (146-8-5-6 他) と分かち書きでも m を用いる場合もある。

### 促音

子音の連続で示している (*issho* (4-1-2-1 他), *ittsz* (136-8-2-11 他) などもある) が、kk と ss を多用しながらも、*ik'ka* (72-4-5-11), *kes'shte* (128-7-5-16) といったケースもある。また、*ototson* (マ) (140-8-3-7) には「オトツサン」とある。

### 長音

イ段 ī, オ段 ō が多用される中、*Sore wa mā dōshtan des!* (210-11-5-5) と、感動詞で ā が用いられている。また、*Dōka* (38-3-1-4), *Dōzo* (40-3-1-6) もある。

### その他

外来語の扱いについては、ローマ字表記の後に、カタカナによる表記を挙げる。

*America* アメリカ (14-2-4-11 他), *Igirisz* イギリス (66-4-4-2 他)・*Ingirisz* (98-6-2-2 他), *Fransz* フランス (66-4-4-3), *Portogaru* ポルトガル (76-5-1-8), *Gurinrando* グリンランド (162-9-4-8), *Yoroppa* ヨウロッパ (54-3-4-10 他), *Rondon* ロンドン (100-6-2-15 他), *Paris* パリス (140-8-3-6 他), *Niu Yoruku* ニウヨルク (146-8-5-4), *Kororado* コロラド (166-9-5-3), *Pibode* ピイボデ (人名 Peabody) (100-6-2-16), *Wetmore* ウエツトモル (人名 Wetmore) (110-7-1-8), *kohi* コーヒー (42-3-2-1 他), *pan* パン (156-9-2-10), *Panya* パン屋 (156-9-2-9), *doru* ドル (110-7-1-5 他), *kanariya* カナリヤ (196-11-1-8)

アポストロフィの使用において、事由が判然としないものとして、*O'jisan* (12-1-3-14), *O'ji* (12-1-3-15) があり、o と j の連続による誤読の回避とも考えられそうである。しかし、前出の *ōji* (96-6-1-13 他) との関わりも考慮する必要があるかもしれない。また、*'mma*

(36-2-6-13 他), *nasaran'nara* (54-4-1-9) といったものもある。

#### 4 分かち書きについて

ローマ字で書き記すにあたり、連続表記(例, *tomeraremasen* (160-9-4-1)), ハイフンの使用(例, *de-aimashō* (28-2-4-9)), 分かち書き(例, *Machi no achi kochi ni* (92-5-5-8))と三つの方法によって、単語(それよりも小さい形態素レベルも考慮される)や文節(さらにはそれ以上)のまとまりを示している。連続表記、ハイフンの使用、そして分かち書きの順に独立性が高くなると考えられる。

そこで、連続表記と分かち書きの中間に位置すると考えられるハイフンの使用を検討することとする。『和英語林集成』縮約ニューヨーク版(1873)のPREFACE. には、‘The hyphen is used always to connect the different members of a compound word.’とあり、合成語を示すにあたり使用されていたことが確認できる。

『ブレンダーガスト』で、ハイフンの使用された69の全例(改行を示すものは除く)を掲出し(とらえづらいいものも多いため、漢字仮名交じりによる表記も併用し、必要に応じてハイフンの前後の分かち書きについても記す)、その上で、連続表記や分かち書きの例も挙げながら、分類・整理を行うこととする。

分類に際して、‘Matai den fuku-in sho.’の分かち書きを扱った木村(2015)では、**I 語基との関わり**(*kawa-bukuro*のように語基に基づきひとまとまりであることを示すハイフン)と**II 複語尾の類との関わり**(*ii-keru*のように文法に関わるつながりを示すハイフン)に分けたが、『ブレンダーガスト』には**II 複語尾の類との関わり**は存在しなかった。

そこで、**語基との関わり**についてのみ、判然としないものもあるが、**A 単語**、**B 量語**、**C 数詞**、**D 数詞+助数詞**を設定して進めることとする。

##### A 単語

大きく動詞に関わるものと名詞に関わるものに分けられる。

「名詞」

〈単純語・合成語(転成名詞を含む)〉

*O-ta Machi* 太田町(14-2-4-6), *Asa-han* 朝飯(26-2-4-3 他・計7例・*asa-kan* (マ)も含む), *yūbin-yaksho* 郵便役所(28-2-4-8), *jin-riki hiki* 人力引き(30-2-5-1 他・計3例), *omeshi-tskai* お召し使い(62-4-3-7), *wa-go* 和語(132-8-1-7), *Ei-go* 英語(132-8-1-7), *toko-banare* 床離れ(152-9-1-12), *yō-ji* 用事(160-9-4-3 他・計3例), *shinbun-kubari* 新聞配り(166-9-5-5), *koku-gen* 刻限(170-9-6-11), *kai riku-gun* 海陸軍(176-10-1-10), *Yō-i* 容易(176-10-1-14), *sai-jō* 最上(178-10-2-5), *kokoro-kubari* 心配り(178-10-2-7), *Giyō-gi* 行儀(180-1-2-9), *dō-chiu* 道中(190-10-5-1 他・計5例), *to-chiu* 途中(192-10-5-6), *Go dō-dō* 御同道(198-11-2-3), *kōjō-gaki* 口上書き(202-11-3-3), *ki-barashi* 気晴らし(204-11-3-10)

「動詞」

〈合成語〉

*otachi-yori* お立ち寄り (8-1-3-11), *de-aimashō* 会いましょう (28-2-4-9), *ode-kake* お出かけ (54-4-1-2 他・計4例), *ode-ai* お出会い (122-7-4-3 他・計2例), *yuki-ki* 行き来 (138-8-2-16), *sashi-hiki* 差し引き (148-8-5-13), *ki wo tske-au* 気を付けあう (178-10-2-6), *shi-muke nasai* 仕向けなさい (180-10-2-13), *shi-tatemas* 仕立てます (182-10-3-4), *obore-kakatte* 溺れかけて (184-10-3-9), *ate-hameta* 当てはめた (204-11-3-9)

「その他の組み合わせ」

*yūbin-atskai-jo* 郵便扱い所 (92-5-5-8 他・計2例), *ō-ku no* 多くの (100-6-2-15), *haya-tskegi* 早付木 (112-7-1-16), *haya-oki* 早起き (158-9-3-10), *Nomi ga i-naku ba* 蚤がいなくば (186-10-4-4 他・計2例), *kokoro-yoku* 快く (188-10-4-14)

「接頭辞」

*O-ki ni* お気に (16-2-4-17), *o-uchi* お家 (22-2-2-13), *o-deai* お出会い (50-3-3-12)

## B 量語

*tabi-tabi* 度々 (204-11-3-8)

## C 数詞

*shi-jiuroku* 四十六 (70-4-4-18), *go-jis sen* 五十銭 (148-8-5-9 他・計2例), *Ni-jis sen* 二十銭 (148-8-5-11 他・計3例)

## D 数詞+助数詞

*Hachi-ji* 八時 (28-2-4-5)

全例文におけるハイフンの使用は極めて少なく、積極的に用いられていない状況にある。そして、上記のようなハイフンの使用に分類できるのであるが、**A 単語**の「名詞」には、*yō-ji* 用事 (160-9-4-3 他・計3例), *koku-gen* 刻限 (170-9-6-11) をはじめ漢語を区切りながらも、*yō ji* (198-11-2-2 他) とスペースを用いたり、*yōji* (58-4-1-12 他) とハイフンを用いなかったりするものもある。また、*ode-ai* お出会い (122-7-4-3 他・計2例), *o-deai* お出会い (50-3-3-12) と「動詞」と「接頭辞」にそれぞれ分類できる。「その他の組み合わせ」にも *ō-ku no* 多くの (100-6-2-15) のようなケースもある中、*ōku* (68-4-4-16 他) が散見する。このような局所的な使用は他にも見受けられる (例、*asa-han* と *asahan*)。内容が関連した例文が連続する場合には見られる傾向がある。

また、*yūbin-atskai-jo* 郵便扱い所 (92-5-5-8 他・計2例) は、*atskai* が母音で始まるための誤読への配慮ともとらえられる。

『会話日本語』の4章は、*Hi-za o-ri ni mu-sz-bu to to-ke ya-sz-u go za-ri-ma-s'*. (1・会話1-1) (注6) のようにハイフンが用いられている (注7)。

一方、5章では、*Moshi, moshi, s'koshi ohanashi moōshitai koto nga aru.* (173・D1・F1) と、原則、ハイフンが用いられていない。改行を示す際のハイフンをのぞくと、*Ben-ten-dōri* (189・D4・N25), *soō-oō* (189・D4・F30), *dekimas'-mai* (191・D4・F56), *rioō-ngaiya* (193・D6・2) の4例が確認できるに過ぎない。

次に、**複語尾の類との関わり**は存在しなかったのであるが、多少関連するところを確認してみたい。特に、独立性の低い助動詞「す・さす」(現代語では「せる・させる」が当たる) 例、*naosasero* (32-2-5-14) や「る・らる」(現代語では「れる・られる」が当た

る) 例, *tomeraremasen* (160-9-4-1) は, 前接する動詞に連続して表記されている。助動詞「た」や助詞「て」といった連用形に接続するものも, 例, *kudasatta* (4-1-1-12) や例, *nosete* (20-2-2-10) のようにひとまとめに記されている。当時の一般的な方法によるものととらえることができよう。

また, 独立性の高い助動詞「べき」の記載方法も一つの指標になる。『プレnderーガスト』では4例あり, *dasz beki* (18-2-1-14), *harau beki* (148-8-5-13), *ki wo tske-au beki* (178-10-2-6) のように分かち書きされているのであるが, *szbeki* (174-10-1-9) とまとめられてもいる。文字列の長さとの関わりもあるものと考えられる。

一方, 『会話日本語』では, A-no o ka-ta wa ta-t-to-mu be-ki h'-to de go za-ri-ma-s'. (42・317-1) と, A-re wa ta-t-to-mu be-ki h'-to da. (42・317-2) の2例に過ぎないが, 分かち書きされている。

ことばのまとまりに対する意識の現れとして, 分かち書きの検討は欠くことができないものである。

## 5 まとめ

『プレnderーガスト』は, 母音の無声化などに配慮しながらも, ローマ字の綴り方, 分かち書きともに一貫性と言う面では不安定でもある。会話を学ぶための学習者向けという意識によるものであろうか。それは, 辞書における検索時のような一貫性を求められないためでもあろう。

また, SECTION 毎にテーマを定め例文が展開している。一例を挙げると, SECTION I. では, *nas'tte* を軸に例文が構築されている。学習方法の兼ね合いから類似する内容を含む例文が並ぶため, 前後で取り扱った内容が繰り返されることとなる。

先にも記したが, PREFACE. には, 次のようにある(試訳を付す)。

Subsequent experience has strengthened the conviction that it needs only to be fairly tried, in order to commend itself to both instructions and learners, whether it be applied to the acquisition of the Japanese or the English language. The lessons in this volume are consternated so as to answer as well for the one as for the other.

そしてその後の経験から, これが指導法としても, また学習者に対しても受け入れられるようにするには実践あるのみである, という確信がさらに強まった。この手引書を日本語・英語, どちらの習得に用いるにしても, この点は変わらない。本書におけるレッスンは, どちらの言語にでも対応できるように構成されている。

英語から日本語のみならず, 日本語から英語の使用にも配慮している点は軸足が定まらないともいえようが, この時期の日本語研究資料に見られる特徴でもある。『プレnderーガスト』自体において, 例文は日本語習得に際して標準的であることを配慮していると考えられるが, いかなる資料をもとにしたのか, また英語の例文と日本語の例文の先後も今後の検討の要があろう。

ローマ字の綴り方については, 一般にヘボン式と言われるものの出現以前の状況を示し

ている資料でもある。『和英語林集成』初版および再版との関わりが強く伺えながらも、『会話日本語』のものを継続している面もある。分かち書きは、ハイフン以外の検討も必須であり、近接した時代の W. G. アストンや E. M. サトウをはじめとした資料も交えて進める必要がある。

19世紀のローマ字で記された日本語研究資料から、ローマ字表記の展開、また標準的な日本語をとらえることができると考える。

### 【注】

(注1) B. D. タッカー(1999) p. 32などによると、1859年に来日した宣教師は次のとおりである。

<神奈川>

- ・米国長老教会 J. C. ヘボン (James Curtis Hepburn, 1815-1911 ・〈1859. 10. 17来日-1892. 10. 22離日〉)
- ・米国オランダ改革教会 S. R. ブラウン (Samuel Robbins Brown, 1810-1880 ・〈1859. 11. 1来日-1879離日〉)
- ・米国オランダ改革教会 D. B. シモンズ (Danne B. Simmons, 1834-1889 ・〈1859. 11. 1来日-1889. 2. 19日本にて没〉)

<長崎>

- ・米国オランダ改革教会 G. H. F. フルベッキ (Guido Herman Fridolin Verbeck, 1830-1898 ・〈1859. 11. 7来日-1898. 3. 10日本にて没〉)
- ・米国聖公会 C. M. ウィリアムズ (Channing Moore Williams, 1829-1910 ・〈1859. 6. 29? 来日-1908. 4. 30離日〉)
- ・米国聖公会 J. リギンズ (John Liggins, 1829-1912 ・〈1859. 5. 2来日-1860. 2. 24離日〉)

ほぼ半年の間に三つの教派が神奈川と長崎の2地点に居留している。教派という枠では、米国オランダ改革教会のみが2地点に居留することとなる。なお、C. エイドリアンスが所属ミッションから独立して、婦人宣教師として1863年まで滞在している。

(注2) 同論文では両書の先行研究として、荒木伊兵衛(1931)『日本英語学書誌』創元社、豊田実(1939)『日本英学史の研究』岩波書店、吉町義雄(1946)「上海刊行日本語文典」「文学研究」35、松村明(1857)「欧米人による江戸語の発音研究」「お茶の水女子大学 人文科学紀要」10、杉本つとむ(1958)「江戸末期の日本語素描—外国人の耳を通してみた—」「国文学研究」18を挙げる。参考までに近年のものとしては、杉本つとむ(1998-1999)『杉本つとむ 著作選集』1 (p. 449), 10 (p. 460 図版が載る) 八坂書房がある。

(注3) 松村(1970) 238頁に収録されるが、184頁にも類する記述がある。

(注4) 詳細は、同書のプログラムと目次にゆずるが、議事録には26の報告が載る。一例を挙げると、J. C. ヘボンの‘Principles of Translation into Japanese.’も載る。G. F. フルベッキ(1984・1985)では、‘History of Protestant Missions in Japan.’を「日本プロテスタント伝道史」として訳し、また、書名を『プロテスタント宣教師協議会総会議事録』とする。高谷道男による『フルベッキ書簡集』(1978)新教出版社の1882年11月29日付・M. フェリス宛(厳密にはミッション主事宛の同封の印刷物)・東京(292頁)と、1883年8月1日付・神学博士 H. N. コップ宛・東京(296頁)に、会議に関連する記述が載る。

(注5) 以下、頁、DIALOGU と対象について、例えば173頁、DIALOGU I, For. 1. は(173・D1・F1)とする。

(注6) 以下、頁、会話番号、会話内の例文について、例えば1頁、会話番号1、例文一つ目は

(1・会話1-1)とする。

(注7) 撥音 Go shin-n-zo (2・会話12・1), 促音 i-t-ta-ka (11・会話82-2), 長音 mo-o-shi-ma-s' (1・会話2-1) はハイフンで示されている。

### 先行研究

荒川みどり (2018) 「T. プレンダーガストによる「マスタリー・システム」の教則書－近代的外国語教授法の先駆け－」『杏林大学外国語学部紀要』30

加藤知己・倉島節尚編著 (1998) 『幕末の日本語研究 S.R. ブラウン会話日本語－複製と翻訳・研究－』三省堂

木村一 (2015) 『和英語林集成の研究』明治書院

グリフィス, W.E. 著・村瀬寿代訳編 (2003) 『新訳考証 日本のフルベッキ－無国籍の宣教師フルベッキの生涯－』洋学堂書店

タッカー, B.D.・赤井勝哉訳 (1999) 『日本聖公会の創設者－C.M. ウィリアムズ主教小伝－』聖公会出版

常盤智子 (2015) 『英学会話書の研究』武蔵野書院

飛田良文 (1962 a・b) 「S・R・ブラウンの日本語研究における動詞の問題 (I), (II)」『国語学』48, 49 ((1992) 『東京語成立史の研究』東京堂出版に収録)

フルベッキ, G.F. (1984・1985) 『日本プロテスタント伝道史－明治初期諸教派の歩み〈上・下〉－』(日本基督教歴史資料集 (7・8)) 日本基督教会歴史編纂委員会

松村明 (1962) 「洋学会話書とその用語－諸本による異同についての二三の問題－」『国語と国文学』39・2 ((1970) 『洋学資料と近代日本語の研究』東京堂出版に収録)

松本隆 (2010) 「S.R. Brown (1875) *Prendergast's Mastery System* の近代語法－文明開化の横浜を舞台にした語学書の分析－」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』33

謝辞：明治学院大学図書館，明治学院歴史資料館，鈴木進先生（元湘南国際女子短期大学教授）には，多大なる御配慮をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

(きむら はじめ 東洋大学文学部教授)

〔表 1〕 直音

会話 日本語		初版	再版	フンダー カスト	会話 日本語		初版	再版	フンダー カスト	会話 日本語		初版	再版	フンダー カスト	会話 日本語		初版	再版	フンダー カスト				
ア	a	a	a	a	イ	i	i	i	i, i	ウ	u	u	u	u	エ	e, ye	ye	ye	オ	o	o	o	o
カ	ka	ka	ka	ka	キ	ki, k'	ki	ki	ki	ク	ku, k'	ku	ku	ケ	ke	ke	ke	コ	ko	ko	ko	ko	
サ	sa	sa	sa	sa	シ	shi, sh', sh	shi, sh'	shi	shi, sh', sh	ス	sz, s'	sz	su	セ	se	se	se	ソ	so	so	so	so	
タ	ta	ta	ta	ta	チ	chi	chi	chi	chi	ツ	tsz, ts'	tsz	tsu	テ	te	te	te	ト	to	to	to	to	
ナ	na	na	na	na	ニ	ni	ni	ni	ni	ヌ	nu	nu	nu	ネ	ne	ne	ne	ノ	no	no	no	no	
ハ	ha	ha	ha	ha	ヒ	hi, h'	hi, h'	hi	hi, h'	フ	fu, f'	fu	fu	ヘ	he	he	he	ホ	ho	ho	ho	ho	
マ	ma	ma	ma	ma	ミ	mi	mi	mi	mi	ム	mu	mu	mu	メ	me	me	me	モ	mo	mo	mo	mo	
ヤ	ya	ya	ya	ya						ユ	yu	yu	yu	ユ	yu	yu	yu	ヨ	yo	yo	yo	yo	
ラ	ra	ra	ra	ra	リ	ri	ri	ri	ri	ル	ru, r'	ru	ru	レ	re	re	re	ロ	ro	ro	ro	ro	
ワ	wa	wa	wa	wa						ユ	yu	yu	yu	レ	re	re	re	ヲ	o, wo	wo	wo	wo	
撥音 (b, m, p 後接)				撥音 (b, m, p 後接)				撥音 (m, p 後接)															
ガ	ga, nga	ga	ga	ga	ギ	gi, ngi	gi	gi	gi	グ	gu, ngu	gu	gu	ゲ	ge, nge	ge	ge	ゴ	go, ngo	go	go	go	
ザ	dza, za	za	za	za	ジ	ji	ji	ji	ji	ズ	dz	dz	dzu	ゼ	ze	ze	ze	ゾ	dzo, zo	zo	zo	zo	
ダ	da	da	da	da	ヂ	ji	ji	ji	ji	ヅ	dz	dz	dzu	デ	de	de	de	ド	do	do	do	do	
バ	ba	ba	ba	ba	ビ	bi	bi	bi	bi	ブ	bu	bu	bu	ベ	be	be	be	ボ	bo	bo	bo	bo	
パ	pa	pa	pa	pa	ピ	pi	pi	pi	pi	プ	pu	pu	pu	ペ	pe	pe	pe	ポ	po	po	po	po	

〔表2〕 拗音

会話日本語	初版	再版	アレンダー カスト	会話日本語	初版	再版	アレンダー カスト	会話日本語	初版	再版	アレンダー カスト	
キヤ	ki-ya ki-a	kiya	kiya	キユ	ki-u (キユウ併用)	kiu (キユウ併用)	kiu	キヨ	ki-yo, ki-o, ki-o-o	kiyo	kiyo	kiyo (キヨウ併用)
シヤ	sh'i-ya sh-i-a	sha	sha	シユ	sh'i-yu, sh'i-u	shu	shu	シヨ	sh'i-yo, sh'i-o (シヨウ併用), sh'i-o-o, sh'i-o-o	sho	sho	sho (シヨウ併用)
チャ	ch'a	cha	cha	チュ	chi-u	chiu	chiu	チヨ	cho-o, ch'i-o	cho	cho	cho
ニヤ		niya, n'ya	niya	ニユ	ni-u	niu	niu	ニヨ	ni-o-o	niyo, n'yo	niyo	niyo
ヒヤ	h'i-ya h'a	hiya	hiya	ヒユ				ヒヨ	hi-o-o	hiyo, h'yo	hiyo	hiyo
ミヤ	mi-a	miya	miya	ミユ				ミヨ	mi-o-o, mi-o	miyo	miyo	miyo, m'yo
リヤ		riya	riya	リュ	ri-u	riu	riu	リヨ	ri-o (リウ併用), ri-o-o	riyo	riyo	riyo
ギヤ		giya	giya	ギユ		giu	giu	ギヨ	gi-o-o, gi-o ngi-yo-o, ngi-o-o	giyo	giyo	giyo (ギヨウ併用)
ジャ	ja j'a	ja	ja	ジュ	j'i-yu, j'i-u	ju	ju	ジョ	j'i-o, j'i-o-o, j'i-o-o	jo	jo	jo (ジョウ併用)
ヂヤ		ja	ja	ヂユ	ji-u	ju	ju	ヂヨ	j'i-o, j'i-o-o	jo	jo	jo
ビヤ	bi-a	biya	biya	ビユ				ビヨ	bi-o-o	biyo	biyo	biyo
クワ	k'-wa, k'-a	k'wa	kuwa								kwa	
グワ		g'wa	guwa	ビユ				ビヨ	bio	biyo	piyo	

※ 『アラウン』の撥音の ng は2章にあたる System of Notation.'のローマ字対照表には見えないもの、会話例の中には見られないようである。

※ 拗長音には下線を付した。

※ その他の資料については木村 (2015) 参照。